
蒼々 《あおあお》 とした翠 《みどり》

ガレット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼々《あおあお》とした翠^{みどり}

【Nコード】

N5922Y

【作者名】

ガレット

【あらすじ】

名もない小さな村に突如現れた『影』。その『影』に襲われる少女。そんな2人が一緒に旅にでることに？

影と少女と女の子（前書き）

自分の妄想をノリと勢いで殴り書いただけですので「寛容な精神」でもって読んであげてください。また、筆者の性格上他作品の影響を多分に受けていますので「どこかでこんなシーン見たな」と思ってもするーするーでぷりーず。感想その他思ったことなんでもいいので書いて頂ければ幸いです。

影と少女と女の子

零章 悪夢

かつて一つの凄惨な事件が起きた。ある街が建物から道路から全てが「氷漬け」になったのだ。それから次々と街が氷漬けにされていき、たった3年ではほとんどの街を凍らせてしまった。これほどの被害が出たにも関わらずどの国も対策をとれなかったのには理由がある。一つはその氷が季節に関わらず3日3晩溶けることがないため情報等の流通が文字通り凍結してしまうのだ。そしてたった3年で世界中をまわるスピードも合わさり、他の街への情報が間に合わないのだ。もう一つはそもそも情報が少なすぎる事である。被害にあった人々は皆一様に口を揃えてこう言うだけだった「夜中に突然雪が降って来て、その雪に触れたモノが一瞬にして凍り付いた」と。それでもわずかずつ情報を集め、いくつかの事が分かった。街が凍る前に1人の少年が必ず見かけられている事、そして一番最初に凍らされた街。さらにはその少年が最初に凍らされた街の近くの小さな村の出身だということも判明した。その事実が各国に公表されるやいなやその小さな村は『悪魔の産まれた村』『悪魔のいる村』として忌み嫌われ迫害されて一切の交流が断たれた陸の孤島と化した。そして最後の街の氷が溶けてから10年の月日が流れた。3年間の地獄を一時の悪夢とし、その痛みと悲しみを『悪魔の村』の本当の名前と共に忘れかけた頃。その名も無き村から始まる物語。

1章 陰影

ある所に森に囲まれた小さな村があった。名前の無い小さな村の入りに一つの『影』が佇んでいた。黒い布を顔に巻き、漆黒のマントで体を包んだ姿はまさに『影』だった。

(こんな所に…いや、今は…)

『影』は村の真ん中を堂々と歩く。どうしたとか異様な見た目に

も関わらず誰もそれを見咎めなかった。『影』はそんな村人の様子をぐるりと見回して息をつく。

（やはりこんな所にはいないか…1人ぐらいいても…）
考えを巡らせながら歩いているとふとある事に気付く。

（人が…いない…？）

これまでもまばらだった人の気配がさらに減り、ほとんど人がいない状態だった。

（何かあるのか…？この先に）

自然と足が村の奥に向く。しばらく歩くと遠くに人の気配を感じた。
（ひとり…か、そして…）

と、口の端を僅かに持ち上げた

（オレに、気付いている…！）

かすかな期待に無意識に歩調を早めさらに歩くと大きな家が見えた。大きな、と言ってもこの村にある小屋の様な家に比べればだが、それでも庭もあるそこそこ大きな家だった。そしてその庭で屈んで作業をしている少女を視界に捉えた。

（まさかアイツが？…オレの勘も狂ったか？…一応確かめるか）

『影』はより一層気配を薄め慎重に少女の背後に立った。少女はいまだ作業をしている。『影』はマントの隙間から黒光りする銃をのぞかせ、少女の後頭部に狙いを定める。それでも少女は気付いていない様だった。

（勘違い…か。だが僅かでもオレに気付いた可能性があるなら…）

引き金に掛けた指に力を込めた

パン

乾いた音をたて『影』の手元から容赦なく銃弾が放たれた。

誰もいない上空へと。

「…！？」

さっきまで屈んで庭いじりをしていたはずの少女の右足が馬蹴りの様に跳ね上がり、『影』の右手を蹴り上げていた。そして『影』が反応するより早く身体をひねり蹴り上げた右手を左手でつかみ巻き

込む様に自身の後ろに引っ張り、拳銃ごと上から押さえ込む。さらに右手で胸ぐらを掴んで顔近づけた。

「…私に何か用？」

『影』はすぐに動揺を隠し、少女の顔を至近距離から見つめる。

「お前かわいい割にやるなあ」

「な…っ！？か、かわ…！？」

少女が動揺したスキに素早く距離を取る。それに反応して少女もバツクステップをする。お互いに距離をとり睨み合う。

「何？ナンパ？デートのお誘いって感じじゃないケド？」

「…いや、デートのお誘いだよ」

「…っはあ！？だとしたら一体どんな文化の国の人？」

「さあてな」

「……」

「……」

2人の間を静寂が包んだ。お互い相手の出方を見ているのか微動だにしない。何秒かたった後突然少女が

「ふえ〜…こうさ〜ん」

と両手を挙げた。

「いいよっ。とりあえずウチあがりなよ。お茶くらいは出すからさ」

「……………は？」

あっけにとられた『影』は呆然と家に向かう少女の後ろ姿を眺めていた。そんな『影』尻目に少女は「真剣な顔って疲れるンだよね〜」と自分の頬をふにふにしながら歩いている。やがて『影』が付いて来ていない事に気付くと

「どったの？話、あるんでそ？ウチでゆっくり聞くとよ」

と、手招きまでしてきた。『影』は全く流れに付いていけずに「あ、ああ」と後ろに付いていくしかなかった。

2章 出立

（なんだこの状況は…？）

思ったより広いリビングの真ん中、木製の大きなテーブルとそれとセットであろう木製の椅子に『影』は座っていた。少女はさっきまで自分を殺そうとしていた『影』を家に招くという奇行に出た。さらに家に入ると

「そこに座って待って♪」

といって自分はそそくさと台所に向かっていった。

（お茶に誘われた…のか？オレは、殺そうとした人間に…？）

ワケが分からない、と思っていると少女がこじやれたティーセットをもってきて『影』の正面に座った。お世辞にも手慣れたとは言えない手つきで目の前でお茶を淹れている少女にとりあえず気になっていた事を訊いてみる。

「何故いきなり警戒を解いた？」

少女は一瞬手を止め『影』の方を見ると「ああ、それは」と、すぐに作業に戻りながら話を続ける。

「ひとつはあなたに敵意を感じなかったから」

「…何を言っている。オレはお前を殺そうと…」

「うん、殺意は感じたケドね、敵意は感じなかった」

「はい」とお茶の注がれたカップを渡してくる少女に対し『影』は理解できない、という様に小さく首を振る。

「…つまり自分を殺そうとはしているが敵対するつもりはなさそうだと、そう感じたとしても言うのか？」

「まあ、そんなところかな。致し方なく、とか、力を試すため、とか」

「…」

「もひとつは勝てる気がなかったから」

「諦めた、と？」

「いくつかシミュレーションしてね、ことごとく殺されちゃったし」

「それであっさり諦めたのか？」

「いやあ、最初に言ったじゃん、敵意を感じなかったって。敵対するつもりのない相手に勝ち目の薄い戦いを挑むほど戦闘狂じゃない

よ。だからちよっとお話しようかなって」

『影』は少し驚いた様に見開いた。

(こいつは…思ったより大物かもな…)

「で、何のようなの？さっき言ってたデートのお誘いってのは冗談として…」

「いや、当たらずも遠からずといったところだぞ？」

「…ふえ？」

「単刀直入に言うぞ。」

「う、うん…」

少女が少し戸惑った様に頷く。

「…付き合ってくれ」

……………ボツ

数秒の沈黙の後少女が一瞬で顔を真っ赤にした。

「つつつつつつ付き合うってそそそそんないきなりっ」

顔を伏せて両手をブンブン振る。

「いやいきなりはいいきなりだが…言い方が悪かったか？なら言い方を変えよう」

「う、うん…」

「オレのパートナーになってくれ」

「飛躍してるじゃんっ!!」

バンッと両手をテーブルに叩きつけて立ち上がった。あまりの剣幕に『影』は少し怯んだ。

「な、何だよ…？」

「つ、付き合うのもまだアレなのに、け、け、け、結婚…なんて、そんな…」

「……………は？」

「……………え？」

また数秒時間が止まる。その静寂を破ったのは

「……ぷっ」

「？」

「アハハハハハハハハッ」

『影』の豪快な笑い声だった。

「え？え！？違うの！？」

「いやいや、アハハハハハ、オレの言い方が、フフッ、言い方が悪かったハハハハ悪い悪い」

「な、なんなのさ…」

なおもクツクツと笑い続ける『影』に訝しげな目線を向けると『影』はふうっと一息つき

「すまないな。もう一度改めて言わせてもらう」

「…誤解の無いようにね」

「ああ、分かっている。…オレと一緒に旅に出ないか？」

「……旅…？」

少女はつぶやく様に聞き返した。

「ああ、旅だ。」

「……」

「オレはある目的のために旅をしている。ただ最近の魔物の凶暴化もあって1人では辛くなってきた…。そこで一時旅の目的を変えて仲間を探していたんだ」

「…それで…わたし…？」

「ああ、そろそろ連れて歩く気はないからな。強いヤツが1人欲しかった。」

「……」

「…これはオレのわがままだ。無理強いはしない。」

少女はさっきまでの元気がウソだったかの様にうつむき黙っている。

『影』はカップに入った冷めきったお茶を飲み干し、立ち上がって背中を向けた。

「明日の朝すぐに発つ。付いて来てくれるなら声を掛けてくれ。嫌ならそのままオレの事は忘れろ。お互い名前も名乗っていない間柄

だ。気に病む必要もない。…お茶、うまかったよ」

そう言って軽く手を振り家を出ようとする。しかし

「…この村には…」

という蚊の鳴く様な声に足を止める。

「？」

「この村には…宿が、無いの」

「ふむ」

（そういえば…）と思う。

「だから…ウチ、使って…広いから」

「いや、オレがいてはお前を悩ませる。宿が無いなら適当に野宿でもするさ」

「いいの、お茶に誘ったわたしの…責任」

「…そうか、じゃあお言葉に甘えさせてもらうよ。ありがとう」

「ううん、…ごめん、ちよつと外の空気吸ってくるよ。」

そう言い残して少女は突然早足に家を出ていった。『影』はすれ違った瞬間少女に『何か』を見た気がしたがそれがなんなのかが分からず、小さくなっていく背中を見送った。

—少女はしばらく走ってから足を止めた。

「はあっはあっはあっ…っふう」

一息ついてから周りに誰もいないか確かめる。もともと少女の家の周りには誰もいない。『影』の視界から外れば後は誰もいるハズがないのだが、それでも確かめずにはいられなかった。少女はもう一度、今度は細く長く息を吐いて空を見上げた。空はすでに橙色に染まり始めようとしている。

（もう、こんな時間か…）

そう思いながらポケットから何かを取り出す。大事そうに取り出したのはゴムだった。水色のゴムに青いキューブが2つついただけの髪ゴム。

「おねえちゃん…」

胸元に持っていたゴムを握りしめるとカチャリと音をたてる。キユツと目をつむり右手でサイドテールを形作るゴムを引き抜いて2、3頭を振ると少しクセのある綺麗なエメラルドグリーンの髪が肩の下まで垂れる。

(…わたしは…)

右手に水色のゴムを持ち手ぐしで後ろに髪を纏め上げ、ゴムをかけようとして手が止まる。

(…わたしは…この“力”を…)

そのまま髪を縛ることなく両手が力なく落ちる。纏めかけた髪もパサリと広がり落ちて、うつむいた顔を隠した。直後

「……あーもうっ!!」

パシーーンツ

と突然自分の両頬をはたき

「うじうじヤメッ!! こんなんじやおねえちゃんに笑われちゃうよっ!! わたしらしくないっ!!」

そして自分に言い聞かせる様に誰もいない場所に大声をあげる。

「“力”なんて関係ないっ!! わたしはわたしの意志でっ! あの人の力になるっ! 初めてわたしを必要としてくれたあの人の力にっ!」

そして再び空を見上げる。今はすっかり茜色に染まった空を見て

「とりあえずまずはご飯っ」

と言って自宅に足を向けた。

「ふんふふーん♪ふふーん♪」

そして少女は台所に立って料理を始めていた。鼻歌を歌いながら。

『影』はその様子をあっけにとられた様に見ていた。少し前、とりあえず身体を休めていた『影』のもとにいきなりバンツと猛烈な勢いで扉を開けて帰って来た少女に一瞬戦闘体制に入りかけたが「食べられないモノとかないよねっ!」と言われ「あ、ああ」と言って引っ込まざるをえなかった。すると「おけっ」とすぐさま台所に向

かい今にいたる。

（飯…か。自分に料理を作るために台所に立つのを見るのは久しぶり…いや始めてか。くすぐったい様な…不思議な感覚だな。しかし…）

「ふふんふんふふん♪」

（えらくご機嫌だな…）

ふと少女が飛び出す前の様子を思い出す。

（いや、元々あんな感じだったか…？旅と聞いて思うところがあつたのかしばらくだんまりだったが…んん？）

オレは何を考えている。と思ひ直す。自分が何を考えていたのかを思い出し、自嘲気味にクツクツて笑ってしまった。すると

「はい、…何笑ってんの？」

いつの間にか料理を持ってきた。少女に気づかれた。しかし特に慌てる事もなく

「いや、何でもないさ」

と応えた。

（お前の事を考えていたなんて言えるわけないしな…）

『影』は今までも旅の道中何人かに声を掛けて来た。その返事は当然ノーだ。当たり前だ、こんな怪しい格好のヤツが気配を消しながら街に入ってきていきなり襲いかかった挙げ句名も名乗らずに旅についてこいなど、話に乗る方がおかしな話なのだ。あまつさえお茶に誘い飯を作り家を貸すなど…

（オレはよほどコイツが気になってるらしいな…いや、気にいつている…か）

「はいっ、どうぞ召し上がれ♪簡単だケドね」

そんな事を考えているうちにテーブルの上には結構な量の料理が乗っていた。「簡単」という言葉どうりどれも手の込んだものではないが全て美味しそうな見えた。そんな視線に気づいたのか、『影』の向かいに座った少女は「えへへ…」と少し恥ずかしそうに笑っている。

「じゃあいただきます」

旅をしている人間ならば普通他人ひとが作った食事などはお茶に至るまで毒を疑うものだが、この時の『影』は少女を疑う気など一切起きなかった。

「えと…口に、合うかな…？」

不安そうに首を傾げながら恐る恐るといった感じで訊いてくる少女に対し

「ああ、美味しいよ」

と答える。実際余計な味付けのされていないそれは確かに美味しかった。それを聞いた少女は心底ほっとしたように「よかったあ」と小さく呟いてからやっと自分の食事に手を付ける。

―それからお互い言葉少なに食事を終え、しばらく経つと

「悪いが、寝かせてもらうよ」

と言って『影』は部屋の隅に歩いていく。

「ん、ああ、おやすみ…って、どこで寝る気？」

壁に向かって歩いていく『影』に訊いてみる。

「ん？もちろんここだよ」

と『影』は床に座り壁にもたれた。それを見た少女は少しむくれながら立ち上がり、ツカツカと『影』に向かって歩いていく。そして座って目をつむる『影』の襟首を掴むとずるずると引きずっていく。「なっ、お、おい何を！？」

わけも分からず引っ張られていく『影』

「ウチ部屋がたくさん余ってるんだ♪そこ使いなよ」

「いやオレは…」

「い・い・か・ら♪」

と、別の部屋の扉を開けてかなり強引に中に『影』を放り込んだ。

『影』は文句を言おうとしたが

「おやすみ♪」

と言葉を遮られ、「あ、ああ、おやすみ…」としか言えなかった。

―その夜『影』はしばらく考えた後ベッドに横になりふと思った。
―その夜少女は使った食器をさっと洗い、自分の部屋のベッドに座りふと思った。

『おやすみ：か、そういつてから眠るのはどれだけぶりだろう』

次の日の夜明け前に『影』は目を覚ました。ベッドに寝ている自分に強い違和感を抱き一瞬困惑する。が、すぐに状況を思い出し落着いた。部屋から出てぐるりとあたりを見回すが、誰も見当たらない。

（当たり前だ、普通の人間が起きるには早すぎる時間だ：）
少し待つか、とも考えたがすぐにその考えを打ち消す。

（来てくれるとしても：この時間に起きれないなら、旅はムリだ）
一度部屋に戻り軽く荷物をまとめると、部屋を出て家の扉に手をかける。が、その手が止まる。

（……）

もう一度部屋を見回し誰もいないことを確かめる。
（今まではこんなことだったことなかったがな：）

頭を振り、扉を開いて外に出る。そして昨日歩いた道を辿って村の出口に向かう。当然外に出ている者はおらず、誰もいない道を歩いていき村の出口が目前まで近づいた所で何かの気配を感じ足を止める。すると

「ほあちよ~~~~~~~~っ！！」

という叫び声と共に突然横から蹴りが飛んで来た。

「ッ！？」

とつさに後ろに跳ぶと、一瞬前まで自分がいた空間に鋭い蹴りが刺さった。派手に土埃を上げ視界が悪くなる。しかしすぐさま土埃を突き破り真っ直ぐ人影が突っ込んでくる。

（……ッ間に合わない！）

かわせないと判断した『影』は左腰に吊った得物を胸元に引き上げる。そこに空を裂くような回し蹴りが叩き込まれ、衝撃で土埃が吹き飛んだ。土埃が晴れ、白み始めた空の下で見えたその顔に『影』は見覚えがあった。

「お前っ!？」

「おそいよっ、待ちくたびれちゃったじゃん」

昨日出会った少女だった。『影』は、はあくっくと大きく溜め息を吐き、得物を収める。

「あれ？銃は？」

「あんなのはオマケだ、オレの相棒はこの刀だ」

「へえ〜」

「で、お前は何でこんな早いんだ？」

「田舎の朝は早いんだよっ」

（途中誰も見掛けなかったが…？）

と思ったが敢えて追及しないでおく。

「じゃあいきなり襲いかかって来た理由を教えてくださいか」
と、腰の刀をわざとカチャリと鳴らす。

「ちよちよちよっ、ちよいまち！冗談！冗談だってば！！…冗談？
違うな…」

「違うのか…」

左足を引き、腰を落とし、右手を柄にかける。

「やややや、違うよ!?! いや違うかい? いやそういう違うじゃなくて違うのが違うっていうか…いやそれもちが…」

「そうか分かった」

柄を握り、刀の鯉口をきる。

「全然分かってないよ!?! えとえとっ…力!! そうわたしの力を見せたかったの!! おけ!?!」

「力を…見せる？」

気になる言葉にすっと構えをとく。その様子を見て少女ははふうとわざとらしく落ち着いてみせる。

「そそ、結局わたしら戦ってないし一応戦えるってどこ見せところかなって」

「…それはつまり…」

「うんっ、ついてくよ、あなたの旅に。てかついていかせて? ううん、もう何言われてもついてくっ、決定事項!!」

少女は『影』の眼前にビシィッと指を突き立てた。『影』は静かに手を除けて

「まあ、まて。最終確認をしたい」と言っただが

「何言われてもついてくっ!!」

と除けられた手を再び突きつける。激しい不安を覚えつつ指を突き立てられたまま話を続けた。

「いいから聞け。これからオレと『約束』をしてもらう」

「約束?」

それを聞いた少女は突き立てた指を口元に持っていて小首を傾げるというわざとらしい動きと共に聞き返す。

「約束というか…旅のルールみたいなものだ。」

「ルールってことは…」

「守れないと思ったら引き返してくれ」

「う、うん…」

そう言っただけ『影』はいくつかのルールを並べていった。

一つ、基本的に隠し事は『あり』

「ありなの!?!」

「ありだ、お前もオレの旅についてくる以上少なからず事情があるはずだ。もちろんオレにもな、だからお互い詮索はなし、言いたくないことは言わない。」

「…ん、なるほど」

一つ、同じ事項に関する隠し事は原則『なし』

「同じ事項？」

「つまり例えばお前がオレに年齢を教えた場合オレもお前に自分の年齢を教えるわけだ」

「えと、相手の事を知りたかったら自分の事を教えろ…ってこと？」

「まあそんなとこだ」

一つ、情報提供者は相手の情報の受け取りを拒否できる。

「…ほえ？」

「同じ例えで言えば、お前がオレに年齢を教えた際、お前がオレの年齢を知らなくてもいいならその旨を伝えればオレは言わなくていいというわけだ」

「ん…と、言いたい事聞いておいて欲しい事があったら一方的に言ってもいいってことだね」

「この3つだ」

「へ、そんだけ？」

「要するにお互いあまり干渉しない。信用できると感じたら少しずつ話す。そんなとこだ」

「おっけ分かった。もちろんわたしの意志は変わらないからね」

「そうか…よろしく頼む」

「じゃあとりあえずルールの確認がてら自己紹介から。わたしはガレル。そのままガレルでいいよ♪」

「名前と呼称、だな。オレはクローディア。クラッドとでも呼んでくれ」

「クロー…ディア？」

「オレからも確認兼自己紹介。そちらの情報は結構だ」

「へ！？ああじゃあわたしは何も言わなくていいんだね」

「ああ、見れば分かるしな」

「？」

すると身体を包む布の首もとに手をかけ

「オレは女だ」

そう言つて一気に剥ぎ取る。真つ黒な布が剥ぎ取られ、真つ先に目についたのは燃えるような赤い髪だった。そしてその下には凜々しくも女性らしさを感じさせる整った顔立ちが、さらに目線を下げれば女性であることの証明である2つのふくらみが服の上からでもはつきり見てとれた。

「.....え」

?

「えええええええええええええええええつ！？」

こうして奇妙な女性二人組の旅は始まった。

2章 名前

村を出てしばらく歩いたがガレルは村からずっとむくれていた。ク
ラッドはそんなガレルに嘆息し何度目か分からないが声をかける。

「お前……まだ気にしてるのか……」

と、ガレルは頬を膨らませ両手をパタパタと振るといふ子供っぽい動作をしながら声を荒げた。

「だってだってっ！女の子相手にあんな勘違いするなんて！！」

あんな：あんな：と言いながら自分でそれを思い出したのか、今度は顔を真っ赤にしてうつむいた。『あんな』勘違いとはもちろん家に招いてすぐクラッドに言われた「付き合う」「パートナーになつてくれ」である。実際今は『旅に』付き合つて、クラッドの『旅の』パートナーになっているワケだが

「だいたいっ、デートのお誘いゝなんて言うからっ」

『二人きり』で『出掛けて』いる現状を見れば確かにデートとは当たらずも遠からずなのだろうが、それでも納得いかなかった。

「だから、オレが悪かったって。一応女なんだ、そこまで気がつか
なかつたんだよ。大体オレが女だと知った上で勘違いしたわけじゃ
ないだろ？」

村を出てもう何度となく繰り返したやりとり

「分かってるよっ？分かってるケド…、それでもなんか恥ずかしい

の!!もうっ、クーのばか!

ガレルはクラッドのことを『クー』と呼ぶ。ガレル曰わく「クラッドってなんか呼びにくい。いいじゃん、クーで、男か女かもわからないし」とのこと。クラッドにすれば名前で女とバレなければ別に構わないのでそのまま呼ばせている。

「はぁ…もういいだろ…」

「むう、まいいや、ところでクーってさ、何で女ってバレたくないの?」

むくれるのに飽きたのか急に話題を変える。

「女ひとりで旅していると色々面倒なんだよ」

「そうなの?」

「ああ、例えば…」

と、クラッドは足を止める。

「?」

「その曲がり角、ひとりで曲がってしばらく行ってみな。すぐ追いつくから」

「?、うん」

言われた通りに角を曲がりしばらく歩くと、脇の森の中からひとりの男が道を遮るように現れた。

「おい、嬢ちゃん。このご時世に女ひとり旅は危ねえぜ?」

気付くと後ろにもそれなりの数の男が現れてガレルは完全に挟まれていた。

「オレ達みたいのがいるからなあ」

へっへっへといやらしい笑いを口々にあげながら徐々に包囲網を縮めてくる。それに対しガレルは悲鳴を上げるわけでもなく、泣き崩れるわけでもなく、ただ

「うっは…」

と心の底から面倒くさそうな顔をするだけだった。するとよほどその態度が気に食わなかったのか全員が手に武器を取った。

「てめえ…状況分かってんのか?」

集團のリーダーらしき人物の言葉を無視し、ガレルはひとり納得したように

「なるほど、これは…面倒くさいな」

とつぶやいた。

「おいテメ……」

という言葉を遮るように男のとなりからいきなり黒い影が現れた。

突然現れた影にざわつく集団を全く気にすることなくクラウドはガ

レルに近づいた。

「だろ？　こうなるんだよ」

「あ、クー。…これ、気付いてたの？」

「当たり前だろ」

などと会話を交わしながらクラッドはガレルのとなりにドカリと腰掛けた。

「多対一は？」

「まあ、それなり」

「これぐらいは？」

「よゆー」
♪

「よし、まかせた」

「よし、まかされた」

無視され続けた上「これ」呼ばわりされた挙げ句、笑顔で会話を交わされ、あまつさえ一人は戦う姿勢を微塵も見せない。さすがに男達も怒りが頂点に達したらしく。ついにリーダーの男が

「つぶつ殺せええええ！」

と声をあげた。そしてそれに呼応するようにたくさんの男達が

うおおおおお！

と地鳴りのような声をあげ、鬼のような形相で四方から襲いかかってきた。ガレルは特に慌てる様子もなく、一度目を閉じ、フツと短く息を吐きながら目を見開く。そして振り下ろされる斧や剣を紙一重でかわしながら、顎や鳩尾といった急所に的確に打撃を与え、もれなく一撃で体格差のある男達をのしっていた。

「やつ！せいっ！とうっ！！」

「がっ」「ぐっ」「ぎゃっ」

ガレルが一撃繰り出す毎に次々と男達が倒れていく様を見たリーダーは

「お、女1人に何してやがる！！それでも男か！！」

と怒鳴りつけた。すると

「だったらおたくも来いよ」

乱戦の中でもよく通るクラッドの声がリーダーの耳に突き刺さる。

「ちょ、何焚き付けてんの！？」という声は耳に入らず。リーダーは一瞬逡巡したが

「ふざけるなあああ！！」

とガレルに向かって猛然と駆け出した。

「ほら、来たぞ」

「んもうっ」

とガレルは突き出されたリーダーの右手に持たれた剣を左回し蹴りで軽くはじく、ガレル左側にそれた右手をすかさず左手で掴み引き寄せる。そのまま巻き込むように

「ほあちよおおおお！！」

ズダーーン

と、見事な背負い投げを決めた。

「……ッかはっ」

一瞬呼吸が出来なくなったりリーダーはその場でしばらく喘ぐ。その様子を見た男達は

「ひっ：」「あ、ありえねえ」「強すぎる：」「バケモンか：？」

と、一気に怯んだ。それを見たガレルはぐると周りを見渡し

「逃げるなら、追わないケド：？」

一瞬空気が固まったがすぐさま男達は口々に悲鳴をあげながら森の中に消えていった。直後

「はふう~~~~~」

とガレルはその場にペタンと座り込んだ。そしてクラッドの方を向

いてニツコリと笑いVサインをした。

「ま、こんな感じ♪」

「上等上等。…立てるか？」

「アハハ…お願い」

とVサインの手をそのまま伸ばす。クラッドは「…まったく」と悪態をつきながらもガレルの方へ歩いていく。と、その視線の先にあるものを見て声をあげる。

「…！！ガレル！後ろだ！」

「ふえ？」

ガレルが振りむくと、そこには身体を起こしたリーダーの男が銃をガレルに向けていた。

「うそ…」

「ちい…っ」

クラッドは懷から銃を出そうとしたが、ガレルに当たる可能性を考え止めた。仕方なく腰の刀に手をかけ一気に駆け出す。

「…！！クー！」

「！」

瞬間、一瞬で抜刀し、銃を真つ二つに切り裂いた。そして男の眼前に抜き身の刀を突き立てた。

「命は奪わないでおいてやる…アイツに免じてな…さっさと消えろ…っ！！」

「ひ、ひいっ」

男は慌てふためいてバタバタと逃げていった。クラッドは改めてガレルに近づき、伸ばされた手を掴んで立ち上がらせる。するとガレルはその勢いのままクラッドに抱きついた。

「クー！！」

「な、なんだいきなり！？」

ガレルはクラッドに抱きついたまま耳元で、聞こえるギリギリの小さな声で囁いた。

「…ありがとう」

「……約束だからな…」

―村を出てすぐのこと。クラッドが女性であることにひとしきり驚いた後、突然思い出したようにガレルは声をあげた。

「あつ、そだそだ、わたしからもさ、ひとつ約束させてよ」

「まあ確かにこちらから一方的に約束守ればフェアじゃないな…まあ内容によるよ」

するとガレルは少し声のトーンを落として言った。

「ヒトを、殺さないで」

それを聞いたクラッドは足を止め、ガレルの顔を見る。その顔はさつきまでとは別人のような真面目な顔つきで真摯な眼差しをクラッドに送っていた。

「…旅において最も恐ろしいのは魔物でも天災でもなく…」

「生きた人間…でしょ？」

「わかってるなら…」

「わかってるよ!!」

突然ガレルは声を張り上げた。さっきまでの元気がウソだったように、うつむいて拳を握りしめている。

「わかってるよ…? わかってるケド…」

その様子を見たクラッドは大きく溜め息を吐きながら頭をポリポリとかいた。

「…逆に訊くぞ…?」

「…うん」

「もし、もしもだが、どうしても殺さなければいけない状況になったらどうする? 他に方法が無く、殺さなければ収拾がつかない、そんな状況に」

「…その時は…」

「……………」

「…その時は、わたしに許可を取って」

「…は？」

「もしそんな状況になったら、わたしに訊いて」

「…はあ…わかったよ。ヒトは殺さねー。もしもの時はお前に訊く。それでいいんだな？」

瞬間ガレルの表情がパアツと明るくなる。

「うんっ!!」

(そういえばあの時も抱きついてきたな…)

抱きついてきたガレルを振り払うこともできず、そんなことを思い出した。するとガレルが抱きついたまま声をかけてきた。

「ねえ、クー？」

「なんだよ」

「ドキドキ、してない？」

「……………は？」

ガレルは少し身体を離して鼻がつくほどの至近距離でクラッドの目を見つめる。

「な、何言ってるんだよ」

「してるでしょ？」

「そんなわけ…っ」

ない、と言いかけて言葉につまる。クラッドは心の中で慌てて否定する。

(までまでまで!! オレはくさっても女だぞ!? 確かに長く自分は男だと言いつつ聞かせながら生きてきたがいくらなんでも同性に抱きつかれてドキドキなんて!)

「ふふ、かゝわい♪」

「!？」

突然ピョンとガレルが離れ

「なんだかんだ言っても女の子だね。こんなことで慌てるなんて♪かゝわいいな」

ニヤニヤしながらそんなことを言った。どうやら慌てているのが顔に出ていたらしい。クラッドは今までで一番大きな溜め息を吐いた。

「…からかうなよ…」

「え…でも…」

何が楽しいのかずっと小躍りしていたガレルがピョンと飛び跳ねてクラッドの方へ向くと

「わたしはかわいい女の子は好きだよ♪」
と満面の笑みを見せた。

「…っ、早く行くぞ！」

クラッドは何かをごまかすようにガレルの横を早足で通り過ぎた。

「あ、ちよと、待ってよ…」

とパタパタと後をついてくるガレルをちらりと見て、クラッドはふるふると首を振った。

「ふあ…っ、もうすぐ街だねえ…」

ガレルは身体を伸ばしながら言った。

盗賊の騒ぎの後、途中念のためと一泊したり、襲ってくる凶暴化した魔物を蹴散らしたりしながら森の中をしばらく歩くと、やっと視界が開け、遠目に街が見えた。

「わたし他の街行くの初めてなんだ…」

「そうなのか？」

「うん…ていうか、そもそも村から出たことがないんさ」

「さて、じゃあどうやって生活していた。あの村には店の類も見当たらなかったぞ」

「あ…これは完全な自給自足地産地消が成り立ってる希少な村なのさ。だから村の外にでる必要がないの」

「物々交換で需要と供給が成り立つのか」

（人間必要に迫られればなんでもできるんだよ…）

「何か言ったか…？」

「う、ううん！何でもない、何でもないよっふうー！」

ガレルの言葉が不自然に途切れた。

「何だ、どうした？」

「分かんないなんか急にぶつ…かつ…て…」

よく見るとさっきまで何もなかった場所に突然何かが現れていた。それが人間だと気付くとガレルはすぐさま頭を下げた。

「ごごご、ごめんなさい！わたし全然気付かなくて……？」

それはまだ小さな女の子だった。青に近い紺色のブカブカのローブを羽織り、頭には同じ色のこれまたブカブカのつばの広い三角帽をかぶり、わずかに金色の髪が覗いていた。要するに

（ふわあ…魔女っこだあ）

（魔女っこ…だなあ…）

というわけだ。その魔女っこはしばしポカンとした後少女特有の高い声あげた。

「え！？あの、私が見えるんですか！？」

今度はガレルがポカンとする番だった。

「…は？なに言ってますかこの子は」

ガレルから救いを求める視線を送られたクラッドは少女に近寄りながら言った。

「…インビジブル、視覚的に見えなくなり気配すら消すが一度認識されると認識した人間には効果がなくなる」

ポンと少女の頭の上に手を乗せる。

「ま、普通ぶつかっただくらいじゃあ『何かいる』程度で『認識』まではないけどな」

「う…あう…」

少女は今にも泣きそうな顔になる。ガレルは慌てて少女に駆け寄り、屈んで目線を合わせる。

「えと、あの、怪我とかない？」

「ふあ…？」

「も、もし良かったらっ、名前…とか教えてもらえる…かな？」

「ひうつ！」

名前と聞いた途端身体をピクンと跳ね上げた少女。クラッドはガレルを見て溜め息を吐いた。

「？」

「あ、あの…あたし…は、その…」

「ガレル、多分コイツは…」

「あ、あのっ！大丈夫、です…」

「??」

ガレルは二人の会話についていけずに戸惑う。

「あたしは、その…『ウィッチ』…です」

ブカブカローブの袖に隠れた手で三角帽のつばを下げて顔を隠す。
その動作にガレルは『ウィッチ』と名乗った少女を思いっきり抱きしめたい衝動にかられたが、ぐっと抑える。

「え…『ウィッチ』って…」

「あたしの生まれた村では、その…半人前の魔術師の男は『ウィズダム』、女は『ウィッチ』と名乗る…風習？なんです」

「へえ……なんで？」

ガレルは視線を上げてクラッドを見る。

「…名前ってのは特別なものなんだ。特に術士にとってはな…。呪術なんかの対象になったり契約するのに必要だったりな」

「へえ……詳しいね」

「一度行ったことがあんだよ、コイツの村…魔法使いの村に」

「魔法使いの…村？」

「ああ、ただ…」

と、『ウィッチ』に視線を戻すクラッド。

「インビジブルはそれなりに上位の魔法だったはずだ。しかし村の場所がバレないために村から出る時は必ずインビジブルをかけなければならぬ。」

「えっ…？それって…」

「ああ、必然『ウィッチ』『ウィズダム』クラスは村から出れないことになる。…そう聞いた」

『ウィッチ』は二人から見つめられ、うつむき小さく震えていた。

「あ、あのねっ、別になにかしようってワケじゃないんだよ！？も

し、もし良かったらおねえさん達に事情を話してくれない…かな？
そのっもしかしたら力になれるかもしれないし、ね？」

「おい…」

クラッドはマントの下で少し顔を歪めた。途端、ガレルにキツとに
らまれた。少し怯み、もう何度目か分からない溜め息を吐くクラッ
ド。ガレルは『ウィッチ』に視線を戻した。

「ダメ…かな？」

「……………あたし…は…」

『ウィッチ』はたどたどしく言葉につつかえながらポツリポツリと
話し始めた。

あたしはこの人の言う通りこの近くにある魔法使いの村出身です。
そこでは普通魔法学校に通って魔法の勉強をするんです。でもあた
しは…生まれてからずっと小さな小屋に閉じ込められていました。
理由は…分かりません。学校にも通わせてもらえませんでした。が、
その小屋には本がたくさんあったのでそれを読んで勉強しました。
小屋の小さな窓から他の人が魔法を使うのを見たりもしました。

「なるほど、それでインビジブルを…」

「はい…」

「……………」

「聞ってるか？ガレル」

「……………」

「ガレル？」

「ふえっ！？ああ、うん、聞ってるよもちろんっ！」

「えと…」

「ああっごめん続けて」

「はい…それで…」

そうやって勉強してたらインビジブルの魔法を見つけて、これなら

小屋から出られると思ってすぐに自分に魔法をかけました。でも、小屋の扉を開けたら探知魔法に引っかかって

「タンチマホー？」

「特定の相手を探したり誰かが通ると術者に報せたりする魔法だ」

「はい：あたしが小屋から出ると誰かにしらせる仕掛けになってたみたいで：」

すぐに足音がたくさん聞こえてきました。あたしは慌てて森の中に入って走って逃げました。

「それで道も分からず走ってたらガレルにぶつかった：と」

「はい：」

3人を沈黙が包んだ。それぞれが何か考えているのか誰かの言葉を待っているのか長い沈黙が続いた。その沈黙を破ったのはやはりクラッドだった。

「で、お前はこれからどうするんだ？」

「…え…？」

「悪いがオレ達では力になれない。事情を聞いといてなんだがな」

「：！ちよっとクーっ！！」

クラッドはガレルの非難の声を聞き流し話を続けた。

「おそらくお前の村の人間は躍起になってお前を探している。」

「……」

「お前を捕らえるか：それが難しい場合：殺すためにな」

「…！！」

「クーっ！！」

ついにガレルがクラッドに掴みかかった。

「：だったらどうする。村に帰すのも危険だ。オレ達でコイツを守るのか？いつまで？抵抗すればオレ達も狙われるだろうな。それでお前は目的を果たせるのか？」

そこでクラッドは言葉を止め、ガレルの目を真っ直ぐ見て言い切った。

「“障害”は少ない方がいい」

ガッ

鈍い音と共にクラッドが吹っ飛び、『ウィッチ』が息を呑む。

「目の前の困っている人を放っておいたら、それこそわたしの目的は達成できない!!」

「そうか…だったらここで…」

「待って下さい!!」

お別れだ、と言いかけたクラッドの言葉を鋭い声が遮る。

「あたしを…あたしを二人の旅に連れて行って下さい!!」

これに驚いたのはガレルだった。

「ちょっとちょっと!?!何言ってるの!?!」

『ウィッチ』は目に涙をいっぱいためて、それでも決してこぼさないように耐えながら二人を見つめる。

「だ、だって…その、あなた…」

「…戦えるのか?」

「クー…」

しばしの沈黙。やがて『ウィッチ』は思い出したようにつぶやいた。

「…まじごとな誠名…」

「?」

「誠名の儀式…あれをやれば」

「……」

『ウィッチ』は首をかしげるガレルに説明を始める。

魔法使いの村では通常通り産まれてすぐに名前をつけられるが、その名前を使い長老の手によって封印を施される。これは幼いウチ、まだ魔力のコントロールができない頃の魔力の暴走を抑えるためで

ある。やがて学校に通い、ある程度コントロールできるようになった頃に自力で封印を解く。そうすることで本来の力と自分の名前を手に入れ一人前になる。その封印を解く儀式が「誠名の儀式」である。

というようなことを言葉につかえながら説明すると、ずっと黙って聞いていたクラッドが口を開く。

「…封印による魔力の低減率は？」

「…？」

「えと、封印でどれくらい力が弱くなるのかな？」

「あ、はい…え…っと、半分？くらいだと…思います」

「だって」

「ん、ああ…」

答えを聞いたクラッドはまた何かを考え込む。そして今度はガレルが質問を

「ところで、その儀式ってどんななの？」

「えと、あたしが誠名を名乗ると魔物が現れて、それを倒せばいいはずです」

「…それは、ひとりで？」

「あの、魔術師は詠唱中は無防備なのでそれをカバーしてくれる仲間を見つけるのも一人前の魔術師として必要なこと、らしいので…」
「つまりわたし達も協力しちゃっていいんだね♪」

「…だと、思います」

「んじゃ、さっさとやっちゃおう！」

「は、はいっ」

「待て」

今すぐにでも儀式を始めようとする二人をクラッドが制止する。

「こんな道の真ん中で魔物を暴れさせるつもりか？」

「あと、それもそだね」

「えとえとっ、森の中に開けたところがありましたよ。かなりの広さ

でしたしあそこなら被害がでないと思います」

「よし！じゃあさっそく行こう！…とクーも来てくれる…よね？」

「…ああ」

「…ありがと」

こうして二人は『ウィッチ』の案内のもと森の中を歩くと、ほどなくして木がはえていない広場のような場所に出た。

「へえ、ホントに木がないね」

「あたし、ここで少し休憩してたんですよ」

「あ、なんかここでお弁当とか食べたいな」

「遊びに来たのじゃねえぞ、やるならさっさとやるぞ」

「あ、うん…ごめん」

「は、はい」

やがて三人が中央付近に集まると『ウィッチ』に注目が集まる。

「オレ達は何も分からないからな、お前に任せる」

「あたしもっ」

「えと、とりあえずあたしの近くに…」

三人が固まると『ウィッチ』は胸に手を当て一息ついてから両手を広げ、詠唱を始める。

「我、『ウィッチ』を名乗りし者、今『誠名』の試練に挑まん。我が名は…『ルナ』…っ！」

瞬間、地面に『ルナ』を囲むように光り輝く小さな円が描かれたと思うと、そこから伸びるように前方に巨大な魔法陣が生まれた。その中心には

「あれは…っ」

「ルナちゃん!？」

真っ黒なルナそのものがいた。しかしすぐさま黒いルナは姿を変え、大きく膨らみ何かを形作っていく

「…おいおい」

「ちょ、なにこれ…」

筋骨隆々な人の身体に牛の顔をもち、ゆうに3メートルはある巨軀とそれに負けない大きさの両刃の斧。――ミノタウロスが雄叫びをあげた。

「これを倒して初めて一人前だと…？術士ってのは化け物か」

「は、はは…これはちょろっとホンキ出さないとね…」

少し後ずさる二人の後ろでルナはしりもちをつき、かなり怯えていた。

「…らない」

「…え？」

「あたし、こんなの知らない！」

「し、知らないって…」

「みんなはもっと弱かった！確かに強そうな魔物だったけど…こんな…こんな化け物じゃなかった！！」

「え…それってどういう…」

「話してる場合か！！」

三人のいる場所に巨大な斧が振り下ろされる。ガレルはルナを抱えてクラッドと逆方向に跳び、すぐさま後ろに跳んでクラッドと合流する。

「ごめんなさい…あたしが、あたしがこんなわがまま言わなければ…ごめんなさい…ごめんなさい」

うわごとのようにごめんなさいを繰り返すルナ。それを見た二人は息を吸い込んで叫んだ。『ルナアッ！！』

「…っ！！」

突然自分の名前を呼ばれたルナはビクリと身体が跳ね上がる。

「その名前、しっつっかなり覚えたからな」

クラッドは刀に手を当てながら言った。

「その名前、わたし大好きだよ♪いい名前だ」
ガレルは指をポキポキとならしながら言った。

「オレは覚えたことは無駄にしたくねえ、絶対にだ!!」

「わたしはその名前をもっともって呼びたいっ!!」

そして二人は構えをとり、声をそろえた

『だから!! 絶対勝つ!!』

「クー!! 足から崩す!？」

「バカか!! 頭狙って短期決戦だ!!」

「おーけー♪」

振り下ろされた斧を左右にかわす。その斧を足場にガレルは高く跳んだ。

「そっちよろしく!」

「分かってる!」

クラッドは斧の柄に向かって走る。そしてガレルは全体重と遠心力、さらに重力を乗せた渾身の踵を頭き、クラッドは目にも見えない神速の抜刀を斧の柄にそれぞれ叩き込む。

「ほあちやあああああ!!」

「せい…っ!!」

が

「…え」

「な…っ」

ミノタウロスはピクリともしなかった。

「うっそ…ひゃっ」

蹴りの反動を利用して飛び退こうとしたガレルは足を掴まれ乱暴に放り投げられた。ルナの近くまで投げられたガレルはしたたかに背中を叩きつけられ一瞬呼吸ができなくなる。

「だ、大丈夫ですか!？ えと…ガレル、さん!」

そこに斧にはじかれたクラッドが飛んできた。

「ク、クーさん!!」

「：クラッドだ、クラッドでいい」

二人はすぐに立ち上がりルナの前に立つ。

「クー：おかしくない：？」

「ああ、固えとかいう問題じゃねえ」

「だよね：」

すると突然ルナが二人の間を抜け、前に出る。

『ルナ（ちゃん）？』

ルナは持っていた大きな本を開き、少しパラパラとめくると目を閉じ集中する。

「ファイヤーボール！」

本が輝き、ルナの上空から炎の玉が3つ飛び出した。炎の玉は吸い込まれるようにミノタウロスに向かって飛んでいき、そして当たる。炎の玉を食らったミノタウロスはわずかだが怯んだ。

「効いてる！」

「：やっぱり」

「やっぱり？」

ガレルが訊くとルナは振り返らずに答えた

「物理無効です」

「物理：無効？」

「打撃や斬撃は完全に通らないってことだ」

「はい、魔法的な攻撃しかアイツには効きません」

「じゃ、じゃあルナちゃんに頼るしかないってこと！？」

「そう：なります」

「さすがは術士の試練ってとこか、しかしあの威力では：」

「はい：とても：」

ミノタウロスはガレルとクラッドの本気の殺気を感じとりこちらの様子を見ている。しかしその膠着状態も長くは続かない。

「ちっ、なんとかならねえか。そろそろアイツも動き出すぞ」とガレルが静かに口を開いた。

「ルナちゃん：さっきの、もっかいできる？」

「え…？はい…でも」

「試したいことがあるの、準備して。いちにのさんでお願い」

「は、はいっ」

ルナは慌てて本に魔法陣を書き込み始める。

「いち」

「で、できましたっ」

いちで魔法陣を書き終え

「にの」

「ふう……」

にで魔力を注ぎ込み

「さん！！」

「ファイヤーボール！！」

さんでガレルが飛び出すのと同時に炎の玉が撃ち出された。さらにミノタウロスも動き出す。「はあああああ！！」

ミノタウロスとの距離が近づくと、ガレルは併走する炎の玉の内2つにそれぞれ拳をぶつける。

「ガレルさん！？」

「お前なにを！？」ルナとクラッドが同時に声をあげる。両手が燃え上がり、ガレルが二人に見えないように顔をしかめる。振り下ろされる斧を最小限の動きでかわし、残りの炎の玉がぶつかった直後、炎をまとった猛烈なラッシュが叩き込まれた。

「うりやりやりやりやりや！！」

ラッシュを受けたミノタウロスの身体が少しずつ下がっていく。

「名付けて！！秘技『ホットビート』！！」

最後に渾身のアッパーを決めると声高にそう叫んだ。

「…ルナ、あと何種類魔法が使える？」

「はいっ！？え、えと…いち、にい…3種類です！」

「上等、バンバン使え、後はオレ達に任せろ！！」

「は、はいっ！！」

さらにクラッドもミノタウロスに向かって駆け出した。ルナは本を

パラパラとめくり、次の攻撃魔法の準備に入る。

「ロックガン!!」

頭上に岩を生み出し、弾丸のように撃ち出す魔法。それを見たガレルは飛んできた岩を後ろから殴りつける。砕けた岩はガレルのパンチの勢いを加算され散弾銃のようにミノタウロスに襲いかかった。

「え…っと、ロックショット!!」

そして思いついたように技名を叫ぶガレル。

「ハッ、いいね、どんどんやれ」

「は、はいっ…アクアドロップ!!」

放物線を描いて飛ぶ水球を叩きつける魔法に今度はクラッドが飛び込む。刀を抜き、鞘で捌くように水球を叩く。刀を納め集中し、一気に振り抜くと三日月型の水の刃が撃ち出され、ミノタウロスの肩口を切り裂く。

「…水月刀、すいげつどうとでも言っておこうか」

新たな攻撃手段を得た三人は次々と技を生み出し攻撃していく。しかしミノタウロスもただやられているわけではなくわずかな隙をついて攻撃してくる。ガレルとクラッドは持ち前の身軽さでそれを回避し、飛んでくる魔法に攻撃を合わせる。数分にわたる激しい攻防の末、ついにミノタウロスが膝をつく。

「はあっはあっ…お…終わり…?」

「いや…まだだろう」

「は…はい…完全に、倒さない…」

しかし二人ともすでにボロボロで、ルナも連続で魔法を使ったせいで虫の息だった。

「ルナちゃん…」

「もう一発だけ、いけるか?」

「は…はい…っ!!」

二人が立ち上がり、足を踏ん張る。ルナが詠唱を始めて1秒、ルナの声と共に動き出す。

「ファイヤーボール!!」

「やあああああ！！」

「はあああああ！！」

走る二人が入れ替わるように交差し、ガレルが2発、クラッドが1発をそれぞれ自分の得物のぶつける。そして膝をつくミノタウロスの斜め左右で一度止まり、十字を描くように交差しながらミノタウロスを送り抜ける。

『三位一体：ダンシングフレア！！』

声を合わせながらガレルが拳を振り払い、クラッドが刀を納め、ルナが本を閉じる。次の瞬間炎をまとった無数の打撃と斬撃がミノタウロスに完全に焼き尽くす。

「や…った…」

とさりとルナがその場に倒れ込む。

「ルナちゃん！？」

すぐさまガレルが駆け寄りルナの身体を抱き上げる。

「ルナちゃん！！大丈夫！？ルナちゃん！？」

「…呼吸」

後から来たクラッドが一言言うと、ガレルは思い出したように呼吸を確かめる。かすかに頬あたる吐息を感じたガレルは安堵の表情を浮かべる。

「生き…てる…」

「連続であれだけ魔法を使っただけ、倒したことで緊張の糸が切れただろう。気絶してるだけだ」

そしてふと後ろを見ると、ミノタウロスの身体が光の粒子になっていくのが見えた。

「ふわあ…なにあれ…きれー」

「おそらく封印されていた魔力だろうな」

やがてクラッドの言葉通り光の粒子はルナに向かって飛んできてルナの身体に吸い込まれていった。

「これでルナちゃんは堂々と自分の名前を名乗れるんだね…」

「ああ、だがすぐに色んな魔法が使えるようになるわけではないがな」

「そうなの？」

「魔力に必要なのは量もあるがそれ以上にコントロールする技術だ」

「へえ」

「さ、今日はここで休むぞ。さすがに疲れた」

「あ、うん」

ガレルはそう言うのと森の中に置いてあったリュックを持ってきた。そして中から寝袋を一つ取り出した。

「じゃーん寝袋！ルナちゃんこれに入れたげるから手伝って」

「あ、ああ」

二人でルナを寝袋に入れるとクラッドは薪を集めにいく。ガレルがルナの寝顔を見つめて微笑んでいるところにクラッドが帰ってきた時には、すでにあたりは暗くなり始めていた。広い空間の一番外側、木の生えている場所までいくと、すぐに火をおこし木にもたれる。

「おやすみクー」

「おやすみガレル」

パチ、パチ…と木がはぜる音だけが聞こえる時間がしばらく流れた。やがてガレルが口を開く。

「クー、起きてる…よね？」

「…ああ」

「……怒…ってる？」

「何をだ」

「ルナちゃんを、助けたこと」 「……」

「ごめんね、目的の邪魔…しちゃったよね」

「……」

「あたし、放っておけなくて」

「……」

「クー？」

ガレルは顔をあげ、クラッドを見てみると、クラッドはマントに顔をうずめて震えていた。

「え…？クー？」

身体を起こしクラッドに近づきそつとマントを下ろすと

「クツクツクツクツ」

クラッドは笑っていた。

「……………え？」

「クツハツハツハツハツ」

「え、ちよつと、え？何？」

笑いをおさめたクラッドはガレルを少し手で押し下げた。

「いや、怒ってないよ」

「ホ、ホント？」

「ああ、というかもともと仲間にするつもりだった」

「え、でも…」

そこでまたクラッドはクツクツと笑う。

「……………もう！」

ガレルはすねるように元の場所に帰り、木にもたれかかる。しばらくクラッドの笑い声だけが聞こえたあとやつと口を開いた。

「演技だよ。演技」

「演技？」

「あんな状態で旅に誘ってもただ流れでついてくるだけだ」

「まあ…そだね」

「オレは自分の意志でついてきて欲しかった」

「…あたしホンキで殴っちゃった」

「あんなの痛かねえよ」

「それはそれでヘコむかも…」

「つと、悪い」

「…ま、いいや。で、どうしてあの子を？」

「とりあえず後衛が欲しかった」

「まあ…二人ともバリバリ前衛だからねえ」

「もう一つはアイツが強いからだ」

「ルナちゃんか？」

「正確には強くなるからだ。確実に」

「…根拠があるの？」

「最初出会ったとき、アイツはインビジブルを使っていただろう」

「そだね、村を出るときは絶対かけなくちゃいけないくて、一人前じゃないと…あれ？」

「そうだな、ウィッチクラスじゃまず使えないはずの魔法だ」

「え、でもあれは…そう！本で勉強したって」

「本で勉強してすぐ使えるなら学校なんかいらねーよ。大体あの魔法が半人前では使えないのは半分にされた魔力なんかでは到底たりないからだ」

「え、じゃあ…」

「アイツは半分にされてなお一人前、いやそれ以上の魔力を持っていた。誠名の儀式で確信したよ」

「そういえば！ルナちゃん、みんなのはもっと弱かったって」

「最初に現れたアイツの影、あれは封じられたもう半分の魔力を表しているんだろう。そしてそれが変化したということは…」

「儀式者の魔力に比例して魔物は強くなる…」

「だろうな。そして今…」

そこで二人は寝息をたてるルナを見る。

「その魔力を取り込んだ、いや『取り戻した』んだ」

「閉じ込められてたのも…」

「…その辺の理由、だろうな」

クラッドは炎の小さくなった焚き火に2、3新たな薪をくべる。パチパチと音をたて、炎が大きくなったのを確かめると、体勢を変え改めて木にもたれかかる。

「ま、ついてきてくれるかどうかは明日改めて訊いてみるがな。今日はもう休め」

「うん、おやすみ」

（それぞれの境遇、それぞれの事情、それぞれの目的…ワケあり三人娘の旅…か。…どうしようおねえちゃん、わたし…ちよっとワクワクしてるかも♪）

次の日、ガレルは誰よりも遅く起きた。眠い目をこすったときに手に鋭い痛みが走り、昨日のことを思い出す。

「おはようございますガレルさん」

「遅いぞガレル」

「ん…おはよー」

軽く手をあげ挨拶するガレル。その手を見たルナは顔色を変えて駆け寄ってきた。

「ど、どうしたんですかその手!？」

「まあ素手で魔法殴ればそうなるだろ」

ガレルの手は火傷や擦り傷でボロボロだった。

「ああ、だいじょぶだいじょぶこんなのへっちゃおふっ!」

ルナはガレルに力一杯抱きついた。ガレルはそれを見て少し困った顔で一息つくとクラッドを見た。

（例の話は?）

（まだこれからだ。お前待ちだったんだよ）

（あははごめん、って起こしてくれればよかったのに）

（ルナに止められたんだよ。疲れてるだろうから…って。責任感じてんだろ）

（…まったくこの子は変なところ大人なんだから）

「ガレルさん?」

「ああっ!はいはいなかな!？」

アイコンタクトでルナの話をしていたガレルは本人に突然話しかけられて慌てる。ルナはそんな様子に首を傾げたがすぐに話を戻した。

「えと、痛まないですか?」

「んもうっ…おねーさんの心配より自分の心配しなさい。ルナちゃんは大丈夫なの?」

「あ、はいあたしは大丈夫です。ありがとうございます」

かがみ込んで目線を合わせ、今度はガレルがお返しにとばかりにルナを抱きしめ、頭をなでる。

「よかった…無事で。おねーさん心配したんだよ？急に倒れるから」
「す、すいません」

「ルナが謝ることじゃないし、無事ならいいの。それだけ♪」

「あー…もういいか？その仲良し姉妹」

「あ、はいっ！ごめんなさい！」

「ああごめんごめん、あんまりこの子がかわいいからつい…」

「ったく…ルナ、大事な話だ」

「は、はい」

ルナがピシッと『きをつけ』の姿勢をとる。そんな素直なルナを見たガレルが今にも抱きつきそうにウズウズしていたが、クラッドはスルーして話を続ける。

「お前はオレ達についてきてくれると言ってくれたが、その意志の最終確認だ。オレと…オレ達と約束をして欲しい」

「約束…ですか？」

そうしてクラッドはガレルに話したと同じことを話し、説明していった。すべて話し終えた後もルナはまっすぐにクラッドを見据えたままだった。

「わかりました。でもあたしの意志は変わりません。あたしを連れて行ってください」

頭を下げようとしたルナの額にガレルが人差し指を当てて止める。

「あう…」

「こちらこそよろしくっ、ルナちゃん♪」

ガレルが満面の笑みを浮かべるとルナは慌てて2、3歩下がりが、大きな帽子をぎゅっと下げて顔を隠した。

「えと…あの、よ、よろしくお願い…します…」

（うーん…かわいいなあもー…）

悶えているガレルの頭を軽くはたいてからクラッドが話しを続ける。

「とりあえず改めて自己紹介しておくぞ」

「あ、はいっ、ルナ：です。えと、そのまま呼んでもらっていいです」

「クローディアだ。クラッドでいい」

「ガレルだよ。おねえちゃんって呼んで♪」

クラッドがもう一度ガレルをはたく。

「ったゝ」

「痛くない」

「そこ否定する…?」

「…フフッ」

その様子を見ていたルナがクスクス笑う。

「やゝっと笑ったよ」

「え?」

「ルナちゃんわたしたちの前でちゃんと笑ったことないでしょ?」

「あ…」

「やっぱり笑ってた方がかわいいよ」

ルナはまた帽子を両手に引き下げて顔を隠す。

「あ、ありがとうございます。…おねえちゃん」

おねえちゃんと呼ばれたガレルの顔がパアツと輝き、目をキラキラさせながらルナに近づく。

「ねえルナちゃん」

「は、はい…」

ルナは少し怯えた返事

「ぎゅうゝゝ…ってしていい?」

スパアアアン

「つつたゝゝゝ…」

「止めろ、怯えてんだろうが」

「だっゝ」

「だってもなにもねえよ」

「…てか段々強くなってるない?」「…たりまえだ。そのうちに…」

「そ、そのうちに…?」

「…斬るぞ」

「自重します!」

それを見てまたクスクスとルナが笑う。

「はう…かわいい…」

カチャリ

「さてっ、次の街行こうか!!」

「まあ待て。…ルナ、お前に渡しておく物がある」

「あたしに…ですか？」

そう言っただけクラッドはマントから一丁の拳銃を取り出してルナに手渡した。

「これは…銃？」

「へえ、見せて見せて」

ヒョイとルナの手から銃を奪ってまじまじと観察するガレル。

「ふーん、すごい装飾。…ってこれ弾どうやって入れんの？」

派手ではないが複雑な装飾をなされたリボルバーのような銃は、どこも開かず弾を込めることができない。

「なんだお前、銃に興味あったのか」

言いながら今度はクラッドがガレルから取り上げ、すぐにルナに渡す。

「この銃はルナしか弾を込めれない」

「え…あたしにしか、ですか？」

「このメンバーでは、な。ほら、弾の込め方を教えてやる。オレの言うとおりに握れ。…そう、人差し指は立ててな」

ルナは素直にクラッドの言うとおりに銃をしっかりと握りしめた。

「そう、そしたらその銃に魔力をそそぎ込め」

「銃に、魔力を…?」

「そうだ、ゆっくり少しずつでいい。できるな?」

「は、はい」

ルナは銃を握りしめたまま目をつむり、少しずつ少しずつ魔力をそ

そいでいく。やがて
…キンッ

高い金属音のような音が銃から聞こえた。

「え？」

「続ける」

「あ、はい」

その後も魔力をそそぎ続け、計3回音が聞こえた時

「よし、もういいだろ。お疲れさん」

「あ、はい…ふう」

「見てみろ」

「…？ あっ」

6連装の弾倉には薄く光る弾丸が3発込められていた。

「すごい…」

「…これって」

「ああ、高密度の魔力の塊を弾丸にして撃ち出す銃だ」

「そんなものが…」

「魔力のコントロールの練習にもなるだろ。ただ銃も魔法も上達す

るには何よりも経験だ。頑張ってくれ」

「はいっ！ありがとうございます！！」

「む…」

ルナが笑みを浮かべるとクラッドは少し難しい顔をした。するとい
つの間にか後ろにいたガレルが肩を組み、耳元でささやく。

（ね？めっちゃめっちゃかわいくない？）

（確かに、これは…いやいやオレは何を言っている）

「？」

（素直になりなっ。ね？ね？ぎゅってしたくなるっしょ？）

（確かに…じゃなくて！！）

「どうしたんですか？」

「いや、何でも…」

「クーもルナちゃんかわいいってさ」

「お前…っ」

「じゃあかわいくないの？」

「いや、それは…まあ、その…」

「かわいいってさ♪」

「あう…」

ルナはまた帽子で顔を隠す。

「ほらクーも…うわっと！」

抜刀された刀が飛び退いたガレルの眼前の通り過ぎた。

「…言ったよな？」

「いやいやいやいや！！照れ隠しにしてはちよつと過激過ぎわふう！！」

目にも見えない剣閃が容赦なくガレルを襲う。

「ちよいちよいストップストップ！！え？ちよちよ、無視！？てか無言やめて無言！！怖い！」

「…ちよろちよろと」

「いやごめんしゃべるにしても言葉を選ぼうお願いだから怖いから」
「フフフフツ」

「ええええ！？ルナちゃん何笑ってんの！？おねえちゃんが斬られる寸前よ！？」

「…よそ見を…」

「ひいっ！え？マジ！？マジで殺^とりにきてんの！？ちよ、ま、いやあああああああ！！」

―10分後。ガレルは文字通り死ぬ気でクラッドをなだめ、三人で食事をしていた。

「二人は仲がいいんですね」

「あれを見てそう思われるのはすごい不本意なんだケド…」 「まだ二人で旅を始めていくらもたってない」

「今出たところ、って感じだよな」

「そうなんですか？」

「そこで意外そうな反応なんだ…」

「そんなに仲良く見えるか？」

「はい、戦いの時も息が合ってたし、さっきのだって昨日今日会った人たちがやるようなふざけ方じゃなかったし」

『……』

二人はしばらく呆気にとられた後、ルナに背中を向けて小声で話す。

（え、あの子もしかして…すごい？）

（いや、すごいはずいが…まさか戦闘センスがあるとは…）

（センスなのアレ！？）

（自覚は無さそうだな）

「そうやってよく内緒話もしますし」

『……』

二人はルナに向き直る。

「…まあ、認めては…いる」

「安心して背中を任せられるよ」

「いや、まだそこまでは…」

「うらやましいです」

「な〜に言ってるの」

ガレルはルナの額に軽くデコピンをした。

「ルナちゃんもう仲間でそ〜」

「あ、ありがとうございます…」

ルナはまた帽子で顔を隠そうとしたが今度はガレルに帽子を奪われる。

「ふわっ！はう…」

慌てて余った袖で顔を隠す。

「ありゃ、その手があったか。照れてるルナちゃんもきつとかわい
いと思うのに」

「恥ずかしい…です」

ペシッ

「たっ」

「ほら、行くぞ。時間が惜しい」

「はゝい。ほら、行くよ」

ポフリとルナの頭に帽子を乗せるガレル。

「あっ、はいっ」

帽子を上げながらパタパタとついてくるルナ。

「：はあゝゝ：」

そんな二人を見たクラッドは溜め息を吐いて頭をかく。

「どうしたの？」

「どうしたんですか？」

「：何でもねえ」

口元の布を少し引き上げて二人にバレないように小さく笑った。

影と少女と女の子（後書き）

ゲームで言えばパーティーメンバーが大方揃ったところでとりあえず終わってます。この先色々考えてはいますがあまり時間がないので書くかどうかは評判次第になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5922y/>

蒼々《あおあお》とした翠《みどり》

2011年11月18日03時52分発行